

[資料等]

学生の言語学習ストラテジーに関する一考察

杉 橋 朝 子

An Aspect of Students' Language Learning Strategies

Tomoko Sugihashi

Language Learning Strategies, EFL

(原稿受領日 2003. 11. 5)

はじめに

語学習得において、上達の尺度を測る方法は千差万別である。英語の場合は、一般には英検やTOEICなどの能力検定試験が手軽に利用されている。しかし、実際の信用性はどうか。TOEICを数回受験したことのある学生が「リスニングテストの途中で眠ってしまった。」と悪びれずに口にするのを聞いて、再考せざるを得なかった。能力テストでは、一過性であるという点や、受験者の心身のストレスに結果が左右されることも多く、信憑性が疑わしいことを考慮しなければいけない。

学習者の言語ストラテジー(Language Learning Strategies)を測る方法がある。言語ストラテジーに関しては、1970年代半ばから様々な研究がなされてきたが(ネウストプニー、1995, p250 ; 池田 & 竹内、2000, p21)、オックスフォード(Oxford, Rebecca L.)が著作(Language Learning Strategies - What Every Teacher Should Know, 1990)の中で発表したSILL (The Strategy Inventory for Language Learning)テスト(Version 7.0)が効率性と中立性もあることからよく知られている。今回このSILLテストを使用し、多摩大学1年生

の学習ストラテジーが1学期間でどの程度変化するのか、を調査した。項目ごとにアンケート形式で答えるので、一過性の状況に結果が左右されることは少ない。本稿の目的は、具体的に学生たちがどのようなストラテジーを用い学習しているのか、或いはどのストラテジーが未発達なのかを調べ、これからの指導に役立てるためである。又、他大学の学生と比較し、イングリッシュシャワーの持つ特徴を浮かび上がらせ、これからのプログラム作りやシラバスについて検討する。

調査の方法

1 対 象

本校の1年生2クラスAとBである。学生たちは入学以後、会話やプレゼンテーションなどの、話す練習を中心にした90分授業を週に4回受けていたが、この調査は14週後行った。学生たちは5月の連休期間を除き、13週間英語で1日を始めていたことになる。人数はそれぞれ、23人、20人であり、調査したのは当日の出席者15人と16人であった。クラス分けは入学時に行ったTOEIC Bridge^(注1)の点数によるもので、平均

点は180点中Aが128.78、Bは123.57(小数点以下第3位を四捨五入)である。

2 SILLテスト (Version 7.0) について

これは、他言語を母国語とする英語の学習者向けに作成されたもので、計50項目に学習者が英語をどのように使用しているか自分で記入するものである。(SILLテストの項目は末尾に添付)例えば、「新しい単語は文の中で使いながら覚える(No. 2)」や「メモや手紙を英語で書く(No.17)」などがある。それぞれの項目は、頻度によって1:殆どしない、から5:殆どいつもする、までの5段階で答える。つまり数字が高いほど、英語学習が意識的にも無意識的にも日常の行動の中で行われていることを意味し、より成功した学習者ということになる。

オックスフォードは言語ストラテジーを直接ストラテジーと間接ストラテジーに分け、更にそれぞれを三つのストラテジー、記憶(Memory Strategies)、認知(Cognitive Strategies)、補償(Compensation Strategies)とメタ認知(Metacognitive Strategies)、情意(Affective Strategies)、社会的(Social Strategies)に分け、それぞれのストラテジーが意味するものを50の項目に分類した。このアンケート形式のテストを使用すると、学習者が自分でどのストラテジーをよく使い、或いは余り使わないかが、ひと目で分かる形式になっている。「信頼性を高めるために何回ものフィールドワークと分析を繰り返し作成され、日本語も含め他の様々な言語を母国語とする英語学習者に適用できる(筆者訳)」(オックスフォード、1990、p 199)とされている。SILLテストには「ストラテジーによってはそれ自体があいまいで、項目の分類もはっきりしていないものが多い(筆者訳)」(Watanabe, 1992, p93)「オーバーラップが多い」、「高校レベルのことを考えている」(ネウストブニ、

1995、p 263)や「間接ストラテジーについては、(省略)理論的フレームワークが未開発で、分類項目数が不足し、未整理」(宮崎、1999、p 38)などの批判があるが、「学習ストラテジーシステム自体は、非常に細かく考慮され、直接ストラテジーおよび間接ストラテジーのそれぞれに具体的な内容を示す細部項目を与え、(省略)学習ストラテジーを確認する場合には便利」(伴、1999、p 30)などの推進派の意見も多く、効率性も高いことから採用した。

3 記入方法

1学期最後の授業で行った。質問項目は教師が読み上げ、学生は手元の調査表でそれと同じものをそれぞれ読み、時には教師に質問し意味を確認しながら解答表に記入した。調査表は英語のものを使用し、質問、意味の確認等、全て英語で行った。1項目につき、学生は、1)高校を卒業したとき、つまり4ヶ月ほど前はどうかであったかと、2)1学期間の学習を終え現状はどうであるか、の二つ答えた。二つの数字の差が大きければ大きいほど、学習効果があったと考えられる。教師が項目を読み上げたのは、時間がかかり過ぎるのを避けるためと意味を確認しやすくするためである。記入に際し、正しいとか間違っている、というものや「こうすべきだ」ということを答えるのではなく、自分の態度や行動について一番あてはまる数字を記入するよう念を押した。

上記1)に関しての調査の方法は、4ヶ月前の自分の状態を思い出して、或いは想像して記入する、という信憑性の弱さがある。一方で、学生は調査の時点で自分のストラテジーを振り返る、という大学での学習前と後の変化について意識せざるを得ない形式になった。つまり、自分の行動について変化を認識できてのみ、違いを記入できるというわけである。

結 果

各クラスの平均は以下の通りである。「大」は調査時の状態、「高」は高校卒業時の状態を示す。(ストラテジー別の個人の結果については末尾に添付)「平均」は学生全員の平均値のため、この表では「大」-「高」の数値とはなっていない。

これをグラフにしたのが以下の図である。Mmから順にそれぞれのストラテジーを表す。(記憶:1, 認知:2, 補償:3, メタ認知:4, 情意:5, 社会的:6)実線は調査時の結果、破線は高校卒業時のものを示す。

推 察

1 授業内容をふまえて

共通点を見ると、両クラスとも記憶ストラテジーは殆ど変化せず、補償ストラテジーと認知ストラテジーが伸びた。これは会話やプレゼンテーションの練習を多く取り入れた授業だったので、単語や表現を記憶する学習(記憶ストラテジー)より、新しい単語を見聞きした時に意味を推測したり、或いは逆に伝えたい表現や単語が分からないときにジェスチャーや身振り手振りで伝える(補償ストラテジー)ことや、練

表1 クラスA 平均

(n=15)

Mm 大	Mm 高	平 均	Cg 大	Cg 高	平 均	Cm 大	Cm 高	平 均	全平均
3.06	3.06	0.00	3.15	2.69	0.47	3.45	2.76	0.70	
Mt 大	Mt 高	平 均	Af 大	Af 高	平 均	Sc 大	Sc 高	平 均	全平均
3.11	2.76	0.35	2.63	2.22	0.41	3.34	2.38	0.97	

(Mm = 記憶、Cg= 認知、Cm= 補償、Mt= メタ認知、Af= 情意、Sc= 社会的)

表2 クラスB 平均

(n=16)

Mm 大	Mm 高	平 均	Cg 大	Cg 高	平 均	Cm 大	Cm 高	平 均	全平均
2.86	2.69	0.17	2.85	2.55	0.31	2.73	2.41	0.32	
Mt 大	Mt 高	平 均	Af 大	Af 高	平 均	Sc 大	Sc 高	平 均	全平均
2.90	2.49	0.40	2.63	2.42	0.21	2.54	2.26	0.28	

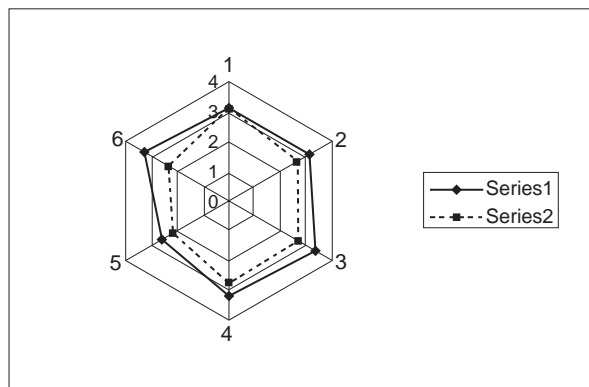


図1 クラスA 平均

(Series 1 : 調査時、Series 2 : 高校卒業時)

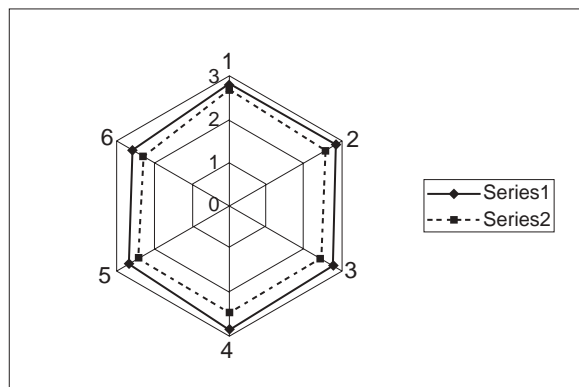


図2 クラスB 平均

(Series 1 : 調査時、Series 2 : 高校卒業時)

習したり表現を分析して理解に努めること（認知ストラテジー）が多かったためではないかと思う。両クラスともストラテジーによってはマイナスの伸びを示した学生もいるが、全員の平均値を見るとプラスになっている。これは英語学習のストラテジーの上昇を各個人で認識できていることである。

全体的に TOEIC Bridge の平均点が 5 点程高かったクラス A の方が数値が高い。調査時の平均値を見ても殆どのストラテジーが「3」（Somewhat true of me：大体する）を超えており、英語を使うことが日常生活の中で浸透していったことを示している。数値の変化を見ると、特に A の社会的ストラテジー 2.38 は、「2」（Usually not true of me：普通はしない）に近い数字だったものが、13 週間の学習後 3.34 になった。社会的ストラテジーは他の人と協力する、感情的に共有する、質問をする、などの他人とコミュニケーションを持てる力である。これは授業の内容による変化とも考えられるが、語学習得に於いてコミュニケーション力の変化を学生自身が認識できたということは、最も喜ばしいことではないだろうか。

B の数値は学習後も平均値が「3：大体する」を超えておらず、変化の度合いも小さい。全体的に大人しい学生が多く、上述したように話す練習が多かったので、学生の性格に合わず意識的に変わらなかったのだろうか。以下の項でこの結果を授業にどう反映させるかを考えてみたい。

（１）他大学の１年生との比較

この項では、他大学の学生の数字と比較し、A、B クラスの平均値について更に検討する。本校の学生が示した学習ストラテジーの変化を浮かび上がらせ、多摩大学の英語プログラムの特徴を把握し、今後の英語プログラム作りに役立てるためである。

表 3 は東京にある X 大学の 1 年生が 1 学期の学習の前後で 2 回 SILL テストを行った結果である。グラフの実線は学習後、破線は前の結果を表す。

表中の 9 は 1 学期の 9 週目で SILL テストを行った結果、1 は 1 週目の結果を表す。「平均」は学生全員の平均値のため、この表の上では「9 週目」-「1 週目」の数値とはなっていない。38 人全員の結果は末尾に添付した。調査方法は上述のものと違い、それぞれの調査時点、1 週目と 9 週目でそれぞれ自分の状況を判断している。グラフ 3 はこの結果をグラフにしたものである。

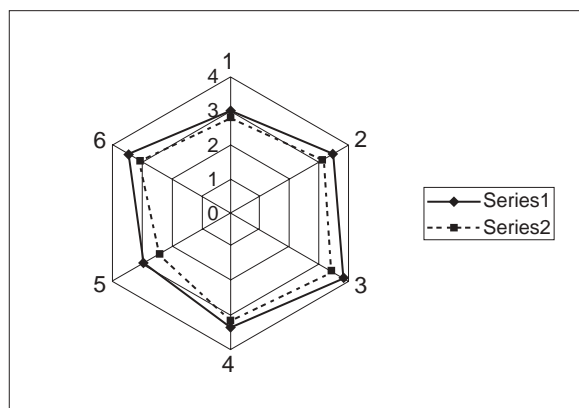


図 3 X 大学 1 年生 平均
(Series 1：9 週目、Series 2：1 週目)

表 3 X 大学 1 年生 平均 (n=38)

Mm:9	Mm:1	平均	Cg:9	Cg:1	平均	Cm:9	Cm:1	平均	全平均
3.0	2.8	0.3	3.4	3.1	0.3	3.8	3.4	0.4	
Mt:9	Mt:1	平均	Af:9	Af:1	平均	Sc:9	Sc:1	平均	全平均
3.4	3.2	0.2	2.9	2.4	0.6	3.4	3.0	0.4	

X大学では、独特のカリキュラムにより「英語で出されている一般教育の講義を理解し、レポートを書き、英語でも議論ができるように、高いレベルの教育・訓練がおこなわれて」(一般教育科目講義要目より)おり、通常1週間で13受ける授業で使われる言語は英語のみであり、1年生は英語習得に集中する。課題やテストも多く、学生たちは忙しく過ごしているように見受けられる。入学時点から英語能力の比較的高い学生が多いのだが、この結果は、英語漬けになるはずの背景を表していない。どの戦略でも(4.0: Usually true of me: 通常行う)には至っていないが、これは学生の認識が厳しく目標とする状態を高く設定している為であろうか。或いは英語ばかりの授業でありながら、1学期間では「通常行う」レベルに達するのは困難だということになるのだろうか。情意戦略の上達が一番大きいのが、これは、学習に対する不安を軽くし、気持ちをコントロールし、意欲を持って学習に臨める力である。英語能力をより高めるべく入学した大学で、実は学生は当初不安な気持ちを抱えたまま学習に取り組んでいたことがわかる。

前述のAクラスと較べても数値の大きさの点からは、英語学習の背景が違うのにも拘らず余り違いは見えない。(例えばX大学では、1年生は1学期に週平均13コマの英語の授業を受けるのに対し、本校では4である。)又、X大学では時間管理やストレス対策、或いはテスト対策術などを学ぶ「学習戦略」を学科として

1学期中学んでいるが、本校の学生は学んでいない。しかし、この結果を見る限りでは「学習戦略」の授業としての導入はSILLテストには影響を及ぼしていなかったことになる。又、英語の授業数がX大学よりずっと少ないのにも拘わらず、Aの学生たちは戦略を短期間で上達させていたので、テスト結果は1週間に受ける英語の授業数には影響を受けないということになる。

(2) 他大学の2年生との比較

この項では他大学の2年生の結果と比較し、本校の英語プログラムについて検討する。

表4は東京にあるY大学の2年生23人がSILLテストを行った結果である。「大」は調査時の2年次1学期修了時での状態、「高」は高校卒業時の状態を示す。上記A、Bクラスの調査状況と同様に、1年4ヶ月前の自分の状況を振り返って高校卒業時の戦略を記入した。「平均」は学生全員の平均値のため、「大」-「高」の数値とはなっていない。(例えばCm大(2.8) - Cm高(2.5)は0.3ではなく、0.2である。)個人の結果については末尾に添付した。

Y大学の平均をグラフにしたものが以下の図である。(Mm:1, Cg:2, Cm:3, Mt:4, Af:5, Sc:6)実線は調査時の結果、破線は高校卒業時のものを示す。

Y大学では英語の授業に習熟度別のクラス編成をしており、このクラスは法律専攻の学生で最も高いレベルである。授業の出席率もよく、課

表4 Y大学2年生平均

(n=23)

Mm 大	Mm 高	平 均	Cg 大	Cg 高	平 均	Cm 大	Cm 高	平 均	全平均
2.0	2.4	- 0.4	2.6	2.6	0	2.8	2.5	0.2	
Mt 大	Mt 高	平 均	Af 大	Af 高	平 均	Sc 大	Sc 高	平 均	全平均
2.2	2.1	0.1	2.1	2.0	0.1	2.4	1.9	0.5	

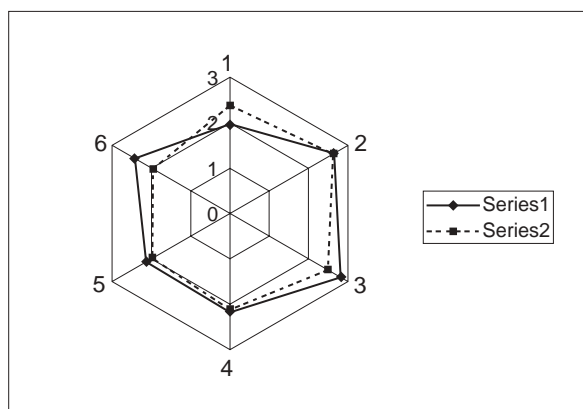


図4 Y大学2年生平均

(Series 1 : 調査時、Series 2 : 高校卒業時)

題も高いレベルのものをきちんと提出する。主観的ではあるが英検で準2級 2級合格レベルの学生たちである。学生は1年次に45分授業でネイティブスピーカーの教師からは週4日、日本人教師担当で週1日英語の授業を受けていた。2年次には、90分授業でそれぞれリスニング、リーディング、ライティング・スピーキング中心の授業を週3回日本人またはネイティブスピーカーの教師から学んでいた。

表の数値を見ると、提出された課題や出席率の高さの割に、2年次のストラテジーの状況、高校からの上昇率とも低い。今回調査した中で最も低迷した数値を示している。授業の成績は良くしたいが、意識して英語を使おうという意欲はあまりない、という状況である。記憶ストラテジーが下降しているのが目立つが、これは大学入試後語彙を増やす努力をしていなかったことになる。1年修了時の調査結果がないので推測の域を出ないが、2年生にも特徴のある授業体制を整えれば、結果が変わってくるのではないか。1年生には毎日英語の授業があり、大学側はネイティブスピーカーの教師一人が週4日担当するという独特の授業形態を設定しているが、2年生には各教師に任された授業内容になっている。担当教師間の連絡も殆どなく、他

の授業で使用している教科書も分からない状況である。学習ストラテジーを伸ばし続けるには学生自身の認識が勿論一番必要だが、学生が意欲を持ち続けられるようなカリキュラムとプログラム作りを、卒業するまでの単位で考える必要があるのではないだろうか。

まとめ

- 今後の授業に活用させるために

本校の両クラスとも記憶ストラテジーは殆ど変化がなかった。活発にするためには、新しい単語や表現を学ぶときには音やつづりをその意味やイメージに結びつけ、授業中に書いたり声を出して学ぶと良いだろう。大学入試が終わって学生は努力して記憶することを面倒に思っているのかもしれないので、見直しや復習の質問を多くし、テストをもう少し取り入れる授業内容にしたほうが良いのかもしれない。又知的連鎖を多くしてもらうべく、予習や復習のために課題や宿題をなるべく出した方が良いでしょう。

Bクラスの様な全体に数値が低いクラスには、X大学で行っているような「学習ストラテジー」の学科の導入も検討の価値がある。自分の学習スタイルや生活態度・習慣を知り、日常起こり得る様々な状況を分析した上でどうしたらよいか判断の仕方を学んだり、自分を向上させるために考えてもらう学科である。学生が自発的に認識を新たにし、学習に対して積極性を高められるのではないだろうか。又、安定した学生生活を送る手助けになるだろう。

Y大学の例の様に、特徴のある魅力あるプログラムは新入生向けで終わることのない様、4年間を通して学べるカリキュラム作りが必要である。英語に興味のある学生が、卒業時まで意欲を途中で削がれず継続して学習できるような環境作りができたら良い。教師としては、学生

が自発的に意識を高めて授業に取り組めるような工夫のある授業を目指したいと思う。

注1) TOEIC Bridge は名前の通り、TOEICを受験するにはまだ英語能力が低い中学、高校生のために作成され、リスニング、リーディングともに50問ずつの1時間のテストである。形式はTOEICに準じているが、それぞれ90点満点の180点が最高点である。詳細は www.toEIC.or.jp/bridge/ まで。

参考文献

- (1) ネウストプニ、J.V. 『新しい日本語教育のために』大修館書店 (1995)
- (2) ネウストプニ、J.V. 「言語学習と学習ストラテジー」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』p 3・22、くろしお出版 (1999)
- (3) 伴紀子 「日本語教育における学習ストラテジー研究事始め」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』p 23・26、くろしお出版 (1999)
- (4) 宮崎里司 「最近の学習ストラテジー研究のいくつかの動向」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』p 37・52、くろしお出版 (1999)
- (5) 宮崎里司 (1999) 「学習ストラテジーの研究方論」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』p 53・68、くろしお出版
- (6) 一般教育科目講義要目、国際基督教大学教養学部 2002
- (7) Burden, P.(2002). A Cross Sectional Study of Attitudes and Manifestations of Apathy of University Students Towards Studying English. The Language Teacher, 26. p3・10. JALT.
- (8) Cutrone, P. (2001). Learner Attitudes towards EFL Teachers in an English Conversation School in Japan: A Survey of Beginner Level Students. The Language Teacher. 25. p21・24. JALT.
- (9) Çcadour, El Sayed & Robbins, Jill. (1996). University-Level Studies Using Strategy Instruction to Improve Speaking Ability in Egypt and Japan. In Second Language Teaching & Curriculum Center. p156-166. University of Hawaii.
- (10) Ikeda, M. & Takeuchi, O. (2000). Tasks and Strategy Use: Empirical Implications for Questionnaire Studies. JACET Bulletin. 31. p21・32. JACET.
- (11) Kimura, M. (2001). Research on Learning Strategy Use in Interactive Tasks by Multiple Data Collection Method. JACET Bulletin. 34. p37・55. JACET.
- (12) Oxford, R. L. (1990). Language Learning Strategies - What Every Teacher Should Know. Rowley: Newbury House.
- (13) Rausch, A.(2000). Improvement in English Education from a Learning Perspective: The Teacher's View Versus The Student's View. The Language Teacher. 24. p11・16 JALT.
- (14) Yamato, Ryusuke. (2002). A Study on Motivation and Strategy in an EFL Setting. JACET Bulletin. 35. p1・13. JACET
- (15) Watanabe, Y. (1992). Classification of Language Learning Strategies. Language Research Bulletin 1991, 6. p75・102. 国際基督教大学教養学部語学科.
- (16) TOEIC Bridge Web site : www.toEIC.or.jp/bridge/

参考資料

SILLテスト Version7.0 (日本語訳は筆者による)

記憶ストラテジー

- (1) I think of relationships between what I already know and new things I learn in English.(英語を勉強する時、今までの知識をいかす。)
- (2) I use new English words in a sentence so I can remember them. (新しい単語は文の中で使いながら覚える)
- (3) I connect the sound of a new English word and an image or picture of the word to help me remember the word. (新しい単語はイメージと音を結びつけて覚える)
- (4) I remember a new English word by making a mental picture of a situation in which the word might be used. (新しい単語は単語を使う場面を想像しながら覚える)
- (5) I use rhymes to remember new English words.(単語は音の語呂合わせを使って覚える)
- (6) I use flashcards to remember new English words. (単語はカードに書いて覚える)
- (7) I physically act out new English words. (動作の単語は実際に体を動かして覚える)
- (8) I review English lessons often. (復習をよくする)
- (9) I remember new English words or phrases by remembering their location on the page, on the board, or on a street sign. (単語やフレーズを覚えるときはどのページのどこにあったかなど書かれていた場所と一緒に覚える)

認知ストラテジー

- (10) I say or write new English words several times. (単語は口に出したり書いて覚える)
- (11) I try to talk like native English speakers. (ネイティブスピーカーのように話すようにしている)
- (12) I practice the sounds of English. (発音やアクセントの練習をする)
- (13) I use the English words I know in different ways(知っている単語をいろいろに使ってみる)
- (14) I start conversations in English.(自分から英語で話を始める)
- (15) I watch English language TV shows spoken in English or go to movies spoken in English. (英語でテレビ番組や映画を見る)
- (16) I read for pleasure in English. (英語で書かれた本を娯楽として読む)
- (17) I write notes, messages, letters, or reports in English(メモや手紙を英語で書く)
- (18) I first skim an English passage (read over the passage quickly) then go back and read carefully.(英語を読むときは最初にざっと読んで意味を取ってから、その後でじっくり最初から読む)
- (19) I look for words in my own language that are similar to new words in English. (新しい単語や語句を見たとき日本語で意味の似ている単語や語句を考える)
- (20) I try to find patterns in English.(文法のパターンを考えて勉強する)
- (21) I find the meaning of an English word by dividing it into parts that I understand. (長い単語は意味がわかるように、いくつかに分けて考える)
- (22) I try not to translate word-for-word. (単語から単語へ直訳しないようにしている)
- (23) I make summaries of information that I hear or read in English. (英語で聞いたり読んだりしたことは簡潔にまとめる)

補償ストラテジー

- (24) To understand unfamiliar English words, I make guesses. (知らない単語は意味を推測する)
- (25) When I can't think of a word during a conversation in English, I use gestures. (話しているときに英語にしまったら、ジェスチャーを使う)
- (26) I make up new words if I do not know the right ones in English. (英語でどういうかわからなくなったら、自分なりの別の言い方を考える)
- (27) I read English without looking up every new word.(英

語で本を読むときは辞典をあまり使わないようにしている)

- (28) I try to guess what the other person will say next in English. (相手が次に何を言うか推測しながら英語で話を聞く)
- (29) If I can't think of an English word, I use a word or phrase that means the same thing(英語でどういうかわからなくなったら、意味の同じ別の言い方で話をつなぐ)

メタ認知ストラテジー

- (30) I try to find as many ways as I can to use my English. (いろいろな方法でなるべく英語を使うようにしている)
- (31) I notice my English mistakes and use that information to help me do better. (自分の英語の間違いに気付くけれど、それを以後の英語の勉強に役立てる)
- (32) I pay attention when someone is speaking English. (英語は注意して聞く)
- (33) I try to find out how to be a better learner of English. (英語がうまくなるために工夫する)
- (34) I plan my schedule so I will have enough time to study English. (英語の勉強の時間が十分もてるように自分のスケジュール作りをする)
- (35) I look for people I can talk to in English. (英語で話ができるよう相手を探す)
- (36) I look for opportunities to read as much as possible in English(英語で読む機会を増やすようにしている)
- (37) I have clear goals for improving my English skills. (英語の勉強の目的がある)
- (38) I think about my progress in learning English.(英語の上達を時々確信する)

情意ストラテジー

- (39) I try to relax whenever I feel afraid of using English. (英語を使うのに怖くなったならリラックスして気を落ち着かせようとする)
- (40) I encourage myself to speak English even when I am afraid of making a mistake. (間違えるのが怖い時でさえ自分を励まして英語を話す)
- (41) I give myself a reward or treat when I do well in English. (自分が英語でよく頑張ったと思うときは自分を褒めたり自分にご褒美をあげる)
- (42) I notice if I am tense or nervous when I am studying or using English(英語を勉強している時や使っている時、自分が緊張しているかどうか気持ちに気付く)

- (43) I write down my feelings in a language learning diary.
(英語で日記をつけ気持ちなどを書いている)
- (44) I talk to someone else about how I feel when I am learning English. (英語の勉強をしているときの気持ちについて他の人に話す)

社会的ストラテジー

- (45) If I do not understand something in English, I ask the other person to slow down or say it again. (わからないときは、相手に頼んでゆっくり話してもらったり、もう一度繰り返してもらう)
- (46) I ask English speakers to correct me when I talk. (英語を間違えたときは指摘してもらえよう相手の人に頼む)
- (47) I practice English with other students. (他の学生と英語で練習する)
- (48) I ask for help from English speakers. (英語を話せる人に助けを借りる)
- (49) I ask questions in English. (英語で質問する)
- (50) I try to learn about the culture of English speakers. (英語圏の文化をなるべく勉強している)

著者プロフィール

杉橋 朝子

ウェールズ大学院応用言語学修士課程修了、シェフィールド大学日本語学科に於いて日本語講師、1992年から東京で英語講師。現在多摩大学他で非常勤講師。